

# REF08



RUBBISH Selecting Squad  
**FOR ADULT ONLY**



■前書きと言う名の反省会■

空の境界好きな方、ごめんなさい。  
始めましての方、ご愁傷様です。  
触手大好きイエー！って方、ようこそ。  
無望菜志です。

やー正直今回はやりすぎた、反省ッ。  
全くもってらっきょと関係無さそうな状況での  
触手本と相成りました。  
その上ボコ腹貫通アリとやりたい放題。  
脳内の良心回路が  
「オマエほんとにらっきょ好きなの？」とか  
「これもう式じゃねーじゃん、  
オリジナルで良かったんじゃね？」と  
始終耳元で囁いてたような気がします。

# RE08

では後悔してるかというところでもなく。  
えーえー、今回は自分でもウンザリするほど  
触手描けたので満足ですッ。  
正直楽しかったッ。  
……イマイチ懲りてないので反省会の  
続きはあとがきにて。  
いきなり始まるエロ漫画でございますが、  
矛盾螺旋にて異空間に囚われた式さんは  
きっとこんな目にあっていたはずだッ、  
というフィルターを通してからご覧下さい。

えーとえーと、  
イマイチ予防線すら貼れてない気もするけど  
まあヨシ！

半分中身の零れた  
この身体は

その隙間を  
埋めるものを  
拒めはしない

あ  
あ  
あ

ギキ

ああ

ああ

ああ

ああ

ああ

ああ

胎内を満たされて  
いくだけで  
喜びに打ち震える

ただ出産というのは  
耐えがたかった

苦しいわけじゃない

ああ

ああ

ああ

ああ

ああ

ああ

ああ

ああ

ああ

ああ

ああ

空っぽに  
なっていくお腹が

かつての喪失と重なり  
酷く悲しくなったから

ああ

ああ

ああ

ああ

ああ

ああ

ああ

ああ

ああ



それはもう  
過去の話



げん——

べちゃ



一時の喪失など  
息継ぐ間も無い

悲しみを覚える  
間も無く空虚が  
肉で塗り潰される

ああ

ああ

ああ

んああ  
ちゅ

ぎゅ  
ちゅ

ズリ  
ズリ

ぐぎゅ  
ちゅ

ズ  
ちゅ  
ちゅ

死線さえ  
埋め尽くすほどの

命で溢れた  
この場所には



孤独や寂しさが  
生まれる隙間なんて

ズリ

あ

何処にも無い

ああ

ああ

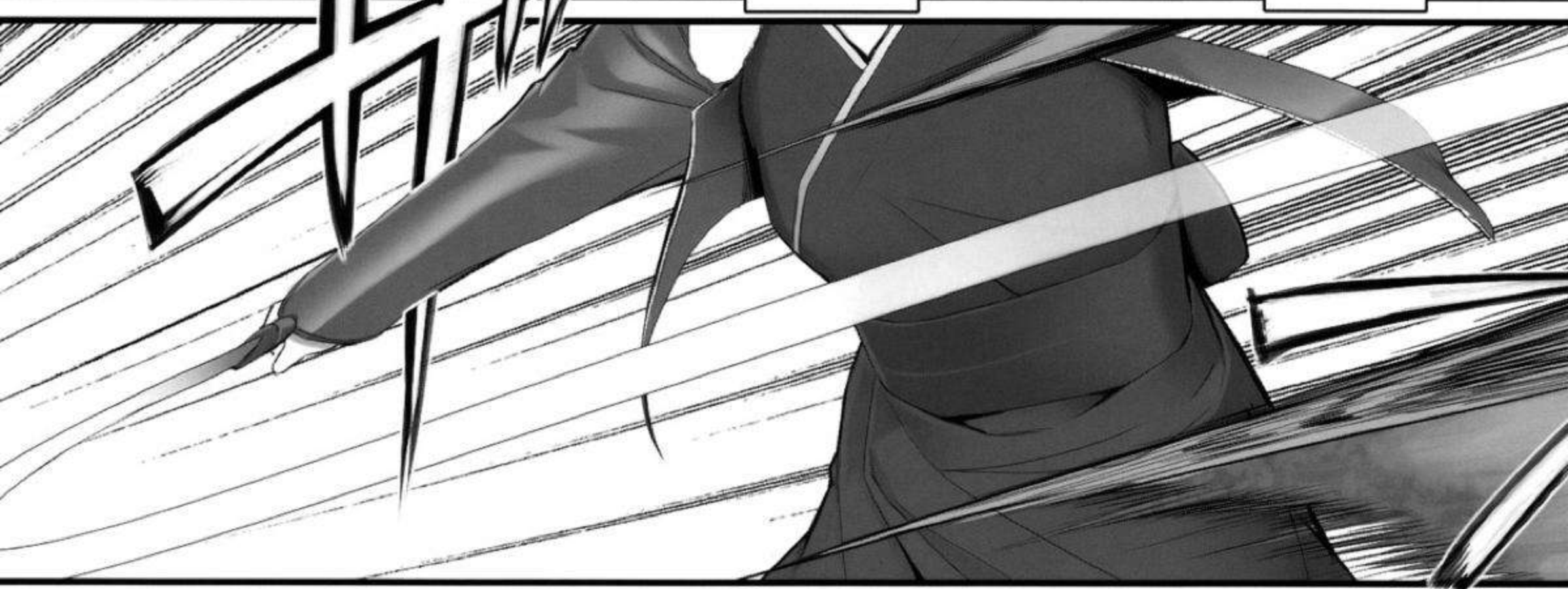
リゼク

え？  
気取るなって？

そんなつもりじゃ  
ないけど…

ああ  
そうだね

初めから  
受け入れられた  
ワケじゃない



数分 数時間  
数日前かも  
しれないけど

当時の私は君達を  
醜悪としか  
感じていなかった

だから殺して殺して  
何度も殺し尽くして  
きたけど



キリが  
なかったね

まったく

数というのは  
厄介極まり無いよ



そうしている  
内に足を捕られ

ツ  
!?

続いて腕

踵

びりびり

びりびり

びりびり

指先さえ  
満足に動かせ  
なくなつて……

うッ……

それでも恐怖は  
感じなかつたね

先の察しが

くう……ッ



案の定君達は私を勝るだけだったね



クッ...

ハッハッ...

ガシ  
ずず...

勿論  
他人はおろか



まったく...



...

ずず...  
ずず...

自分でもロクに触れない場所を弄繰り回されるのは

良い気分じゃ無かったけど...

うん...

まあその...



少しは...

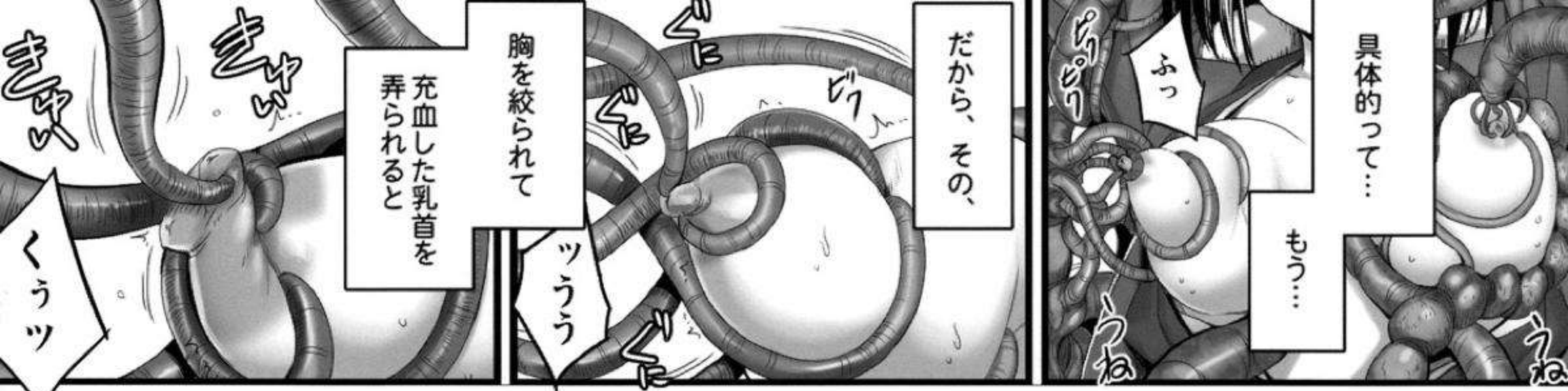


ズン...

...

感じてたかな...

タチの悪い...



具体的って…

もう…

だから、その、

胸を絞られて

充血した乳首を  
弄られると

ツウッ

くうッ



必死に  
かみ殺そうと  
しても

声が漏れる  
くらい…

んうッ

良かった…

ふうッ



っっていうかね  
君ら無茶しすぎッ

ッウ

んッ

細いからって  
そんなもの  
捻じ込むとこじゃ  
ないぞ？



そりゃ耐え切れず  
叫びますよ

ツあ!?

くああ!



ううッ



締めるわ



はうッ

む……  
しょうがないだろッ

知ってはいても  
こんな風に  
触れられたのは  
初めてだったんだ



ひう  
!?



捻るわ



ううッ



ツああ!?



引っ張るわ



大体ここも  
胸より敏感だって  
言うのにな



これでもう  
半分意識トんでた  
んだけど

……って嘘ッ?

っあ!

ああっ!

こんなところ  
入れてたの!?

や、やめっ

うああああッ!

うね  
うね



ワケわかんなく  
なつてたけど

全然  
気付かなかつたな…

……え？



ととにかく

これまで  
腕を捻じ切られたり  
骨が折れたり

痛みには馴染みの  
あるこの身体だけと



お、美味し  
かつたって…

ツおあ!?

バカじゃ  
ないの…?

こんな甘ったるい  
刺激なんて  
経験が無かったからさ

頭の中はほとんど  
濁っていったよ

それでも  
今考えればバカ  
みたいだけど

意地になって  
意識は繋ぎ  
とめていたなあ

さっきも言ったとおり  
この先は頭では  
知っていたからね

うあ…

何をされようが  
それを凌げば  
隙が出来る

ツ!

相手があいつ  
じゃないのは少し  
切なかつたけど

うん?  
誰だっけ…

まあとにかく  
身体を  
勝られるくらいは  
耐えられると  
思ってたんだ

ああ…

ツラッ…

甘いも甘い  
大甘だったさ

!?

こんな  
もの…

わかってるよ

あぐ…

ズクーン

突然視界が  
歪んだかと思ったら  
自分を見上げて  
るんだもの

驚くというより  
ぼかんとしたよ

ずず

ずず

ずず

ず

みちゅ

やめろって

何見せて  
るんだ!

ぐちゅ

や  
やめろ!

けどすぐに  
感覚を共有している  
事に気付いて

ツおあ  
あああアツ!

ズ  
ズ  
ズ

ズ  
ズ  
ズ

なんだよ…

初めてだったんだ  
声くらいあげるさ

私だって  
女なんだし……

あ…かッ

ああッ!

大体二本も  
入れられるなんて  
想像つくわけ  
無いだろッ

うあ…ッ!

ツああ!

ギ  
ギ  
ギ



つぶさに  
見せ付けられた  
あげくに

はぐッ！

しかも  
自分の胎内を  
蹂躞される様を

んおア！

ブブブ  
ぶおー！

ひぐああー！

はぐッ

ブブブ

ギョッ

ギョッ

ギョッ

ギョッ

ギョッ

揺き分けられる感覚と  
揺き分ける感覚と

こんなもの両方  
感じさせられたら

はあう！  
ああう！

ギョッ

うあああ！

ギョッ

ギョッ

ふあああ！

んおあ  
はひッ

ホント  
何言ってるのか  
全然わかんない

そう こんな風に  
人の言葉なんて  
忘れてしまうよ



ん…まあそりやね  
偉そうに思ったけど  
やっぱり怖かったさ

けどそれも一瞬

んうあ！

あああアッ！

**ボ  
ッ**

お…んあ

**ギ  
ギ  
ギ**

はッ！ んああ！

君達だって  
思い出してみなよ

**ギ  
ギ  
ギ**

そんな事感じられる  
頭は真っ白に  
なつてたからね

**ギ  
ギ  
ギ**

**ギ  
ギ  
ギ**

恐怖っていうのはさ  
そう感じる前に  
怯えたり喚いたり

そういうものだろ？

こん…にヤッ

はッ！

だから私が  
こんな顔してたって  
変じゃない

変じゃない  
ったら…ッ

ヤッああッ！

**ギ  
ギ  
ギ**

んあ！

あああ！

もっ……

**ギ  
ギ  
ギ**



あぐッ

けど隙間が埋まっていくたびに

不思議と懐かしくなったのは覚えてる

おあッ

ま そんな事もあつさり吹き飛んだけどね

んぶッ!?



もう辛いんだか悲しいんだか

んおおおおッ!

嬉しいんだか気持ち良いんだか

ワケわかんなくなつて



うヴッ!

僅かに残つてた隙間も

満たされた途端

おっ!

うおお!

んおあッ!

完全に意識が  
とんじやった



だから  
この先の事は  
まるで覚えて  
ないんだけど...







気が付いた時

といつても

あッ

んあ

いつ気が付いたかも  
わからないくらい

馴染んでた  
けれど

んあ

あは



んあ

ぶびる

ぶびる

んあ

ぐちゅ  
ぎちゅ

ボゴ

ドキ

そんなものを  
自分が得られる  
なんて

この頃には  
もう幸せいっぱい  
だったね

思っても  
いなかっただから  
尚更だよ

おあ





こころの叫び

やあ  
ぎぎ  
あー?

急に出てこうと  
するんだもの

本気で酷いと  
思ったよ

なんが

折角  
満たされてるのに  
どうして私から離れて  
行こうとするのか  
わからないし

らぬえ!!

ぎぎ  
ちゅ  
ぎぎ

ちゅ  
ぎぎ

必死になって  
我慢してるのに



君らは無理やり  
引きずり  
出しちゃうし



さあ びゅん さあ びゅん さあ びゅん さあ びゅん さあ びゅん  
 びゅん びゅん びゅん びゅん びゅん びゅん びゅん びゅん びゅん びゅん  
 びゅん びゅん びゅん びゅん びゅん びゅん びゅん びゅん びゅん びゅん

彼を亡くした事を  
 思い出して  
 酷く悲しかったな



えびゅん...  
 えびゅん...  
 えびゅん...



気持ちよくて  
 泣いてる  
 んじゃないッ

違うッバカラ  
 違うッたら



本当に悲しくて  
ここでもまた  
一人になるのかと  
思ったけど

ぼっかりと  
空いた穴を  
君達はすぐに  
埋めてくれた  
んだものね

そんなのは  
ただの勘違い

それでようやく  
わかったんだ

この場所で  
私は何も失わない  
溢れ零れてしまった  
歓喜も幸福も  
いくらかでも注がれるのだ

ただ「私」自身も  
器から溢れ出して  
しまったけど

何も怖い事はない



君達とひとつに  
なるだけだもの

いつまでも  
ずっと一緒に

ああ 本当に  
暖かくて

良い気持ちだ



全部が  
気持ちよくて

どこまでが  
私なのか――

もう

わからない



**RE08**

みんな凶がってしまえと強く念じた。脳裏に自分が痛む腹部の様な物が浮かぶ。それは鮮烈なピンク色の肉塊と、壺のような物だった。連なった鮮紅色をしたそれと壺のような袋に回転軸を作り、それを、曲げた。

「っ!? っつあああっつっ!? うああっ……!!」

式の全身がビクリと震えた。腹部がキリキリと痛み、同時に訪れる灼熱感。激痛というほどの物ではなかったはずなのに、急に全身が自分のコントロールを外れて跳ね上がってしまった。わけもなく力が抜けて、膝がガクガクと震える。

「なん……はあ……うあっ……なんだ……こいつ……は……!」

痛みとは違う、今まで感じたことのない不思議な感覚が全身に染み渡りつつある。何とか足の震えを止めようとしたが、肌が粟立つような、しかし決して不愉快ではないという理解しがたい状態に抵抗できない。

反射的に腹部を押さえようとして、式は息を呑んだ。

(これは……浅上の能力か!)

あらゆる物の死線を捉える目には見えた。自分の腹部に赤色と緑色の綺麗な螺旋が、まるで触手のように絡みついている——! そう、藤乃は新たな能力に開眼し、式の中を直接ねじ曲げているのだ。

このままではヤバイ。そう思った刹那、二度目の腹部がぎゅっと絞られるような衝撃が訪れた。今度のはもつとずつと強い衝撃。胴体がねじれるような感触こそ無かったが、腹の中が燃えるように熱くなった。位置は下腹部。

もちろん式には見えなかったが、子宮がねじり上げられていたのである。

式の蠟人形のように綺麗な肌にさあっと赤みが差し、沸々と珠のような汗がわき出してきた。それは戦いの昂揚とは違う興奮からわき起こる、甘酸っぱい少女の香りを持った汗だ。

殺人嗜好症における殺人は快樂の追求である。セックスにたとえれば殺人はエクスタシーの瞬間に等しい。なら、その課程である闘いは身を昂ぶらせる愛撫に他ならない。浅上藤乃という最高の『パートナー』を得て、最高のプレイを愉しんでいた式の肉体が昂ぶっていたのはむしろ当然のことであった。

そう大きくもない内臓器官が藤乃の能力にこね回され、縦横無尽に姿を変えていく。

「うっ……お……あああっつ……く、そ……!」

子宮を強烈な力でぎりぎりとなじられ、絞り上げられる。闘いの興奮に敏感になっていった肉と肉が強く触れあい、擦れて絡み合った。すでに疼き始めていた子宮は、本来あり得ない接触行為に強く反応して強烈な悦びの電流を式の全身へと送らせる。

「おうっ……!」

子宮内壁同士がぎゅゅと擦れ合うたびに電流のような刺激が下腹でわき起こり、不思議と心地よい痺れが背筋を駆け抜けて式の脳を撃った。その度にゾクリと頤がのけぞり返り、引きつったような声がこぼれてしまう。そして、式はとうとう自分の身体を支えきれなくなった。下半身から力が消え失せ、膝がすくと落ちてしりもちをついてしまう。

「あ……くそ……っお……!」

かろうじてナイフは落とさなかったが、全身を支配しているけだるい感触に握っているのがやっとだった。ましてや身を起こすなど出来そうにもない。

「ちきしょう、なんなんだ……なんなんだ……よ……！」  
 「凶れ、凶れ、凶れ、凶れ……！」

式が初めての未経験の感覚にとまどっている間にも、藤乃はうわごとのようにそうつぶやき続けていた。そして、脳裏に浮かんでくるイメージに逆らわず、全ての物をねじ曲げていく。

ほとんど制御されていない力は強大で、また情け容赦なかった。

「くはあ……んは……っつあああああっ!?」

式の全身が再びビクンと大きくのけぞり上がる。

「ちきつ……しょう……こんどは……んくあ!?」

さつきから早鐘を打ち続ける心臓がひねり上げられたようだった。実際にそうされたのかと思ったが、違った。見れば白無垢の着物からはだけつつある双乳がぎりぎりどねじれ上がっている。

すでにワンサイズはアップするほどに張りつめた乳房が根本から段を作るように波打っている。その様はまるで男の手で乱暴に揉みこねられているようだ。

どこか甘やかな熱はぐにゅぐにゅと乳房をねじ揉まれるたびに温度を増し、胸全体が燃えるように火照ってくる。

さらにお椀型の胸が円錐状になるほど絞り上げられると、甘美な電流がわき起こり式の脳裏を突き刺した。ぴりぴりするような甘い刺激に思わず身をよじると、突き出された乳房が紬の裏地に強く擦れる。

「つくっ……！」

その度に胸の中でツーンとした不思議な刺激がわき起こり、式の整った頤がカクカクと揺れた。シャワーあがりのように桜色に上気した顔を、珠のような汗が一筋こぼれ落ちていく。

駆け抜けた甘美なパルスは大ききこそ藤乃に負ける物の、形の良さでは

劣らない乳房にわだかまっていった。心臓が早鐘を打ったたびに快感も増幅され、小振りな胸が満々と張りつめていく。

もちろんその先端で桜色に色づく乳首もそれに同調するように性的反応を表し始めていた。ぷっくりと膨れあがった乳量の真ん中でびくびくと震える肉突起は度重なる興奮に硬く尖り、小指の先ほどまでに大きさを増している。

(これも……浅上の能力か……!?)

ここまで急激に肉体に変化する事などあり得ない。ならば反撃しなくてはいいように鬨り殺しだ——!

そう思った式は意味もなく震える右手に握ったままのナイフを改めて握り直す。手のひらがぐしょぐしょになるくらい汗が沸き立ち、そうでもしなければすっぱ抜けてしまいそうだったのだ。理由不明の痺れるような感触は、ともすれば指から力を奪っていきそうだった。

しかしそんな式の努力をあざ笑うかのように藤乃の能力は暴走を続けた。乳房をねじり続けていた歪曲の力は、ピンピンにしこり立っている乳首に向かったのである。

きゅいつ、きゅりりっ!

「んくはああああ……っ！」

目の前で閃光がひらめいた。乳首が弾けてしまったのではないかというような強烈な刺激が式の胸を襲う。仰向けになった背中が反射的にビクンと反り返り、ブリッジを造った。我知らずのうちにはしたなく足を開かせて大股開きになってしまう。

はだけた着物のすそからのぞけた純白のパンティはもうお漏らしをしたかのようにしっとり濡れ、式の股間に張り付いている。身をよじるたびに密着の度を増し、ひくひくと蠢き始めた秘裂に食い込んで淫靡なしわが

作り上げられていた。

それでも情け容赦なく赤と緑の螺旋は式の乳首をおもちやのように弄んだ。視覚化された藤乃の能力が敏感な勃起に巻き付いて、強く締め上げる。ほんの小さな乳首でさえもが段々になるぐらい細かく絞り上げられ、三百六十度回ってしまうのではないかと思うぐらいにねじ曲げられる。痛みと紙一重の痛痒感が肉突起に走るたび、ただでさえ熱くなっていた乳房が煮解けてしまうのではないかと思うぐらいに熱を増した。自分でも正体の分からない、弾けてしまいそうな激感が迸る。

「はあうっつ！ くそ……っお……」

式はせえぜえと肩で息をする。その表情は苦悶でもあり、とまどいでもあった。殺された左腕に永続的に走っている痛みならば、理解できる。しかし今肉体を冒している形容しがたい感触はどうしてもわからない。わからない——。

(……?)

私は本当に解らないのか？ どこかで感じたようなこの気持ち。何処までも際限なく昂ぶって、肉が熱くなるこの耐え難い、だが受け入れてもみたくなるこの感触は……。

(そうか、これは、殺人を犯すときの快樂、か)

——私は同じ快感なら、されるよりはシたい。このまま殺されるよりは殺したい……。

思考がどこかクリアになった式は、ナイフをつかみ直す。浅上の能力と自分の身体を考えればチャンスは一瞬。

「凶れっ、凶れっ、凶れ、凶れ」

式を凝視しながら連呼する藤乃に向かって、式は全力を振り絞ってナイフを突き上げる。身をバネのように起こしながら繰り出された白刃は軌跡

すら残しながら藤乃の生白い首に迫った。

「ひっ……！」

形を持った殺意が迫るのを見た瞬間、藤乃は怯えた。それでも彼女は曲げることを止めない。いや、止められなかった。だって、曲げなければ殺されてしまうから。そう悟った少女はさらに曲げる箇所を増やした。脳みそがずきずき痛むが、仕方がない。

「凶れっっっ！！」

「っはあっ！！」

式の全身が大きく震えて、普段ならば絶対出さないような、か弱い女の子のような嬌声が口からこぼれた。死の恐怖に瀕した藤乃が最大級の能力で曲げた箇所は、もっとも快感神経が集中している股間の小さな尖り、クリトリスであった。

突如としてわき起こった激感に手から力が抜け、腰も砕けた。ナイフの切っ先は見事に外れ藤乃の髪を切り裂くことすら出来ない。脱力した式はまたしても無様に転がってしまった。

小さな肉豆が赤と緑の触手に絡みつかれ、暴力的な力で根本からねじ切らんがばかりにねじ上げられる。その度につんと鋭い悦楽が肉豆の中でわき起こり、腰から背骨を通して体中に快感をまき散らしながら脳天にぶち当たった。心地よいハンマーで頭を思いっきり殴られたようで、まぶたの裏に極彩色の火花がいくつも散る。

藤乃の能力は繊細だった。ただクリトリスをねじり上げるだけではなく、下から上へ力に差をつけてねじり上げてくる。

これをよどみなく繰り替えされると、その様はほとんど見えない指に扱き上げられているかのようだった。もっとも敏感な神経器官を絶妙な力加減で扱き上げられては未通女の式などひとたまりもない。



「つおっつ！ おっ!! つくひ!!」

じゅりゅつと一ききされるたびに甲高く突き刺さる針のような鋭い快感がわき起こり、息が詰まるほどの快感が押し寄せた。腰がみつともないほどガクガクと揺れ、口からヨダレが垂れ落ちるのを止めることも出来ない。

ねじり上げられたままの子宮がより激しく収縮を繰り返す、膣もキュンキュンとうねり狂って愛液をひたすらにわきたたせまくった。甘酸っぱい香りを漂わせる雌蜜が式の股間からだらだらとこぼれ落ちていく。もう下着は下着としての用をなしていなかった。吸水容量を超えた布は汁をほとんど透過させ、白装束の裏地に大きな池を作っている。

「くはっ……はっ……はっ……おお……」

ナイフをつかんでいた指が勝手に閉じたり開いたりを繰り返す、獲物が手のひらから滑り落ちていく。

(しまっ……)

た、と思うヒマもなかった。今度はクリトリスに合わせて、肉壁がざわめく膣そのものも一緒にねじり上げられたのである。

ぎにゅちゅっ……

「つおっつおおおおおおっつおっつ!!!」

式は目を見開いて大きく背をのけぞらせた。ブーツに包まれた足がつま先立つようにびいんと伸びて、こむら返りでも起こしたかのように震える。

敏感になった肉壁と肉壁が接触し、くちやくちやくと絡み合った。螺旋状にねじられるその様は、ドリルで肉粘膜を掘削されているような物だった。ほとんど刺激を受けたことのない壁が一枚一枚絞り上げられ、蜜液を絞り出されていく。その度に縮緬のような組織一つ一つから快感電流がわき起こって、式の頭の中で火花のように散った。

「おはあああっつおっ、おっ、うっおおおおおっつおっ!!!」

意識が白く吹き飛び、身を揉んで悶絶すること以外のが出来ない。

「凶れ、凶れ！ 凶れ!! 凶れ!!! 凶ってしまえっ!!!」

藤乃の呪詛にも似た血を吐くような叫びと共に、式のもっとも敏感な部分全体がねじ上げられた。乳房、乳首、子宮、そしてクリトリス、その全てが、曲がった。

ぎりゅりゅりゅりゅううううっつおっ!!!

「!!! おおおおはあああああああっつおっつ!!!」

全身のあらゆるところで快感が弾けた。自分の意思とは全く無関係に全身が弓なりにしなり、背骨が折れてしまおうのではないかというぐらいにきついブリッジを描いた。

突き出すようになった股間からは真っ白く、そして甘酸っぱく臭う愛液が下着を抜きぬけてびゅるっ、びゅるっとなんと勢よく吹き出した。それは糸すら引いて弧を描いて飛び、砕けたコンクリートと白装束を淫らに汚していく。

初体験の絶頂の奔流には愛液だけではなく、これもまた始めて味わう潮吹きすらがまじっていた。

「あああ……っお……あ……あ……お……」

腹の中にたまっていた液体が出尽くしてなお、式は痙攣するように二度三度空腰を使った。そうしてから全身の力が抜けたように、かくりと腰が落ちた。自分の淫蜜をたっぷり吸った下着の上に尻を突き、べちゃりという音がする。

「はっ……はっ……はっ……はっ……!!!」

「わたしは本当はこんな事はしたくないんです」

藤乃は傍らに落ちていた鉄骨に目をやった。激しい戦闘で砕けた柱から転げ出た物だろうか。断面は熱を加えたアメのようにねじ曲がっている。



補強用に使われる物なのか、太さは藤乃の手首ほどしかないようだ。長さは膝上ほど位だろうか？

「凶れ」

藤乃が一にらみすると、鉄骨はきしんだ音を立ててたちまちねじれかえった。一度、二度、三度と力学の法則をまるで無視したひねりが加えられ、硬いはずの鉄骨がいとまたやすく姿を変えていく。

歪曲の少女が力を抜いたとき、そこにできあがったのは原形をとどめない別の何かだった。見た目にはコイル状のスプリングのようであるが、先細りの形状になっている。

それを手に取ると、未だ腰に力が入らない式の方へ歩み寄ってくる。

「そんなのは嘘だ。それならどうして——お前はよがっているんだ。あの時も、今も、どうしてそんなに気持ちよさそうなんだ？」

藤乃はそんな、と言いよどんで、手にした鉄骨のなれの果てを式の股間に押し当てた。

その太さは式のまだ何者の侵入も許していない慎ましやかな秘所と比較して、余りにも太いようだった。だが、藤乃にとっては普通程度の物だ。彼女を犯していた不良グループの中には、奇妙にでかいイチモツを持っていた者がいた。それをモデルにしたのだから。——もつとも、それは先端だけの話で後ろの方はその数倍ほどもあるのだが。

まだ蜜が乾いていない秘唇にくちゅりという濡れた音を立てて密着した。鉄のひんやりとした感触が伝わってきて、ぶるりと身震いする。

「うっ……。結局、お前は悦んでいるんだよ。人を傷つけるのがたまらなく感じるのさ」

私はあなたとは、違う——。

藤乃は無言でスプリングの先端を式の中に力一杯押し込んだ。  
ぬぶうっ……！！

「うあ……っつ……！！」

式の上半身がギクンとのけぞった。絶頂の余韻がまだ残った肉体は、異物の先端を処女とも思えぬ柔軟さで飲み込んでしまう。激しい運動で処女膜はすでに裂傷していたのか、破瓜の血はなかった。痛みもない。その代わりに、最初から快感だけがダイレクトに頭の中に響いた。

肉の輪を大きくこじ開けて、鉄のエッジがふるんぶると充血した肉ビラを弾きながら入り込んでくるたびに下半身の温度が鰻登りに増していく。白く引き締まった、カモシカのような脚に汗がいくつも浮き上がり、びくんと震えるたびに霧のように薄暗い空間に飛び知っていた。

ねじられ、揉まれるだけで挿入を受けていなかった膣は待ちに待った刺激に悦び、歓迎するかのよう絡みついていった。冷たい鉄に襲をかき擦られると、下腹部に女悦が炸裂して腰が自分の意思を離れて跳ね狂う。その体勢と動きは自ら鉄骨をもっと深く挿入して欲しがっているようにしか見えなかった。

藤乃はそのおねだりに応え、もっと強い力でスプリングを式の膣内に押し込み始める。シクシクと痛むお腹に顔をしかめながら、ほとんど全力に近い踏ん張りで狭い肉穴に異物をねじ込んでいく。

鉄骨だった物が分け入るたびにぶちゅりと愛液が押し出されるように噴出し、宙を舞った。内股にもべったりと淫液がこびりつき、あまりの量に皮膚がふやけるほどだ。

「っつはあっ……んあ、あ、ああああ……！！」

スプリングがめり込むたびに、その入り口でびよこんと顔を出すクリトリスが激しく弾かれる。その度に膣を埋める感触と相まって、鮮烈なほど

の悦びがわき起こる。その度に普段はむつつりと結ばれた口を大きく開き、犬のように舌を突きだして絶嬌を上げてしまう。

髪を振り乱して悶絶する式などお構いなしに、鉄骨は容赦なく膣道押し進んだ。鉄骨の表面に浮いたビスや、ねじりを加えたときに出来た段差が敏感な肉壁を真つ平らになるまで押しつぶしながら、ゴリゴリと乱暴に擦り上げていく。藤乃がぐっ、ぐつと力を込めるたびにその振動が伝わり、振動は甘いさざ波となって股間から全身へと駆け抜けていった。

「うお……っ……！ お……ああ……っく……そ……くそっ……おお……っ」

——とすん。

スプリングの動きが止まった。先端が膣道の最奥、子宮口に押し当たったのである。あれだけイキまくりだったとはいえ、ほんの数時間前までは処女だった少女の奥は固く閉じられている。

「ん——っ、うん——っ!!」

「うああああっっっ、あがっっっ!! そこは……！ お、押すっ……くう——っ！」

藤乃が力を込めるたびに手がふるふると震え、スプリングも揺れた。子宮口を振動させながら、コリコリと押し揉まれるたびに下半身の感覚が無くなりそうなほど壮絶な悦びの電流が弾ける。下半身を甘く焼き尽くした電撃は背筋を通って全身に火花をまき散らしながら、最終的には脳へと到達した。

藤乃と闘おうとする殺人嗜好の思考すらもが甘い炎の中に放り込まれ、ぐずぐずに煮解けていってしまいそうだ。まぶたの裏で極彩色の花火が上がり、失血で白くなっていた意識が桃色に染まってくる。

股間からは恥ずかしい汁がしぶくのが止まらず、藤乃の手に向かって何

度も何度も濃いにおいを放つ液体をぶちまけてしまった。もう彼女の手はぐちよぐちよに濡れている。力を込めても込めきれないのは、そのせいもあるだろう。

「ごめんなさい——わたし、しないといけないから」

男に嬲られた、そして入れられた屈辱と、最後に感じた苦痛を分かち合うために。犯されて初めて自分が生きていることを実感できたから、この人を犯さなければならぬ。

小さく笑ったままの藤乃は、痺れるように震えている式の足を手にとった。そして足ごと腰を引きずり上げる。ほとんど脱力していた和装の少女はそれに抗することなど出来ず、軽々と体勢を変えさせられてしまった。

新しい姿勢は上半身を地面に着け、下半身は頼りない明かりを灯す蛍光灯が明滅する天井に向かう形だった。つまり、鉄骨が突き立てられた秘唇を藤乃につきだしている格好ということになる。

「……………」

恥ずかしくはない。そんな感情は元から無かったし、どうでもいいことだ。——なのに、なんでコクトーの顔が浮かぶんだ。……あいつの言った、『君は女の子なんだから』なんていう、詰まらない言葉がひっかかるんだ。どうしてこんなに胸の内かもやもやするんだ。

「っはうっ!!」

そんな式の葛藤も長くは続かなかった。突然下腹部に走ったズンっと重く響く激震に邪魔をされる。何事かと思えば、藤乃がはしたなく広がった黒髪の少女の股間に足を置いているではないか。いや、正確には肉道にめり込んだスプリングに足をかけている。薄く笑ったままの少女の瞳は正気ではなかった。

「…………っえいっ」

軽く息を吐くと、藤乃は式の股間めがけて蹴りを繰り出した。鉄骨スプリングの底部をあらん限りの力で、思いつき蹴りつける。

「ごすんっつっつ!!  
「おおおおおうううっつっつ!!」

スプリングの先端が鈍い音を立てて子宮口にめり込んだ。股関節が外れそうなほどの衝撃が走り、骨盤が割れるのではないかというほどの激震が式を襲う。

しかしそれは苦痛とはならなかった。異常な能力で異常な性感を呼び覚まされた殺人嗜好症の少女は、今はあらゆる物を快感として受け付けてしまっている。

腰にずしんと響く重い振動は寸刻を経ずに快感振動となって全身に反響した。足の指先から頭のとっぺんまで、叩いた音叉のように快感の波紋が響き渡っていく。生きている右手が勝手に開いたり閉じたりを繰り返し、汗で蒸れ始めたブーツの中でも足指がキュツと丸まる。

押し込まれるたびに式の股間からポンプのように汁が吹き上がりびゅるっと飛び出してパンティストッキングに包まれた藤乃の足にかかる。本気の愛液は白く濁り、パンストに濡れシミを作りながら糸を引いてねっとりたれ落ちていった。

わき起こった悦楽の波動が消えきらないうちに藤乃は足を振り上げ、何度も何度も鉄骨の底を蹴る。かかとで乱暴にけり込まれているうちに、子宮口が強引にこじ開けられているのか徐々にスプリングが膣内深くめり込んでいく。強く押し込まれるたびにスプリングが一段潜り込み、肉壁がこそげ落とされそうなほど強烈に抉られた。

「はおっつっつっつおおおおおっつっつ!!」

その度に膣内が燃え上がりそうなほどの激感が発生して、式は目を見開

いて獣のような絶叫を迸らせた。——それ以外のことが出来なかったのだ。余りにも強烈な快感は全身を麻痺させてしまったかのように、わななく唇はだらしなく全開されて閉じること出来ない。全身は自分のコントロールを全く離れ、ほとんど無軌道にがくんがくんと、藤乃に蹴られるまま踊り狂っている有様だ。

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

ほとんど白目を剥いて悶絶している式なのに、藤乃は責めの手を——足だが——ゆるめようとはしなかった。先ほどよりも高く足を振り上げ、力一杯振り下ろす。

ぐちゃっつっつっつ!! ぼんっつっつ!!

「——っおおおおおおおっつっつ!!」

ぬかるみに足を突っ込んだような音が響き渡る。それに紛れてかすかな音が聞こえた。固く閉じられていたはずの子宮口がこじ開けられ、スプリングの先端が子宮内にめり込んだ音。極小さかったが、式にはやけによく聞き取れた。肉体の中で響き渡った音だったからかも知れない。

式の肉体がひととき大きくのけぞり返り、藤乃の足に腰を押しつけるようにしなる。そしてびくびくと病的に全身を痙攣させた。瞳は驚愕と問答無用で叩き付けられるた強烈な快感にただ白目を剥き、中空を泳ぐ。その目の端から涙が滂沱とあふれ出て汗とヨダレで汚れた顔をさらにぐしゃぐしゃに濡らしていった。

弓なりに体がしなった分、腹部に埋め込まれて異物の形がはつきりと腹に突き出してしまふ。なだらかだったお腹は内部から押し上げられて無惨に膨れあがっていた。紬の帯がはち切れんばかりにパンパンに膨れあがり、まるで妊娠中期のように大きくなっている。

だがそれが妊娠ではないのを示すのは、スプリングの形を示すかのよう

に凸型に膨れあがっていることだった。しかも、藤乃の足の動きに合わせて先端がねじれ、腹の皮もよじれている。

「かはあ……っ……はあ……あっ……は……!!」

腹部を埋め尽くす猛烈な圧迫感に、式は陸に上がった魚のように口を喘がせた。藤乃が淫らな女を罰するかのように足を踏みじると、鉄骨がぐりりと回って子宮奥が強く抉られる。その度に甘美な螺旋が腹部でわき起こり、白無垢の少女は全身をガクガクと痙攣させて強く感じ入る。

それでも藤乃の代償行為は終わりを見せようとしない。彼女のほっそりした足は白濁の池を踏みながら、式の股間をただひたすらに抉り続ける。今度は自身の能力を使い、最初に殺人嗜好症の少女を打ちのめした時のように敏感な部分をねじ曲げながらだ。

「――凶れ」

思いつきり式の股間を蹴りつけながら上気した顔で静かに念じると、式の上向きにたれていた乳房に赤と緑の螺旋が絡みつく。そしてぎゅりいと根本から一気に絞り上げられた。もちろん小指の先ほどまでに膨れあがり、勃起しきっている乳首も言うまでもなく容赦ないねじり上げに晒される。

「おっ……っ……!!」

股間から生まれ出る暴力的な快感の嵐に、おっぱいからわき出る痺れるような悦楽がミックスされて式の脳天を直撃する。全身の皮膚がぞわわつと震え、サウナにでも入っているかのような異常な発汗を見せる。

乳房がねじ上げられたということは、次は股間の小さな尖りの番。再び藤乃は靴底から愛液の糸を引きながら足を振り上げ、

「凶れ」

厳かに唱えると同時に振り下ろす。

「はぐ……っ……っ……おうああああ!!」

子宮に数度目の衝撃が走ったのと、パンパンに膨れあがったクリトリスが螺旋を描くほどにねじられたのはほぼ同時だった。全身の感覚が吹き飛ばされ、代わりに快樂という記号で上書きされていく。失った記憶も、持っている経験も、全て無意味な物と化し全てが悦楽に塗り変わるのだ。

股間から、そして体中からわき起こる圧倒的な快感電流に抗しきれぬ術など無い。かろうじて式をを式たらしめているのは心の内で密かに眠っているもう一人の自分の存在なのだろうか。

だがそんな細かい抵抗を打ち砕かんとばかりに、藤乃はとどめの一撃を繰り出した。先ほどまでと同じように足を上げ、意識を集中させる。被虐を分け与える事に酔った少女が見通すのは巨大な鉄塊が埋まった子宮、そして膣。

「マ、ガ、……レ!!」

子宮と膣が雑巾のように絞られる。それに合わせて渾身の力で振り下ろされた足が鉄骨を打った。子宮が突き上げられ、式の呼吸が一瞬止まる。ぎりゅううううう……!!

「――お……!!」

式の脳裏で何かがぶちりと途切れた。敏感すぎる雌肉が外力によって鉄骨に密着させられていた瞬間を狙って、思いつき押し込まれたのだ。絡みついてきた膣壁がそぎ落とされんがばかりに擦り上げられ、ねっとりまとわりついてきた子宮内壁もがごりゅごりゅと抉り込まれた。

「――かはっ……!! おっ……か……お……お……あ……っ……!!」

意識が、全身が白い奔流に飲み込まれてもみくちやにされてしまう。何処までも何処までも高いところに吹き飛ばされて降りてくることも出来ない。



式の全身がガクガクと大きく震えた。そしてひときわ強く愛液が吹き上がる。藤乃の足を濡らし、スカートにまで飛び散るほど勢いのよい射精にも似た放出が何度も何度も続く。

それに負けじと潮も激しく噴出され、藤乃のストッキングを濡らす。それが終わったかと思うと、今度は尿が勢いよくこぼれだした。完全に脱力しきった少女がそれを止める術などない。焦点の定まらない瞳で自分の恥ずかしい水のアーチを見つめているだけだ。

藤乃はそれをかわそうともせず、スカートを濡らしながらうっとりとした痴態に見入っていた。

——ああ、そうか……。私を辱めた男達は、こんな気持ちを私に分け与えようとしていたんだ。

今の藤乃にはあの男達の気持ち痛いほど良く分かった。淫らな汁にまみれ、全身を上気させて息も絶え絶えに喘ぐ式の姿は素晴らしく美しく、そしてどうしようもなく興奮する。ぜえぜえと喘ぐ息づかいがとてもはかなげで、愛おしく聞こえてしまう。きつとあのとときの私も男達の目にはそう映っていたのだろう。

式の液体にまみれながら、藤乃はうっとりとして自分の身体を抱いた。「あ……は……」

ぎゅつと自分を抱きしめると、少しづつ硬度を増していた自分の乳首が下着と衣服に擦れ、ピリツとした悦感電流が走った。熱い吐息が口をついて漏れていく。

最後に男に犯されたときよりもっと気持ちよく、そして胸の奥が甘くときめいた。股間がムンムンと熱く、お腹の奥で痛みを混ざってきゅんと甘美な疼きが産まれた。清楚な白のパンティがじつとりと湿っていくのを感じる。

——もっと分かち合いたい……。もっと痛みたい……。もっと、痛みを私に、そして貴女に——。

藤乃は傍らに転がっていた鉄骨を手を取った。そして式にねじ込んだ物と同じように、自分の能力でねじ曲げていく。できあがった物はほぼ同じ物だったが、唯一違うのは前も後ろも両方スプリング状になっており、さらに金属疲労を起こす直前までし字型に折り曲げられていることだ。

「あは……」

双頭のスプリングを手にとると、藤乃はゆっくりと学生服のチャックに手をかけた。そして、ゆっくりと下ろしていく。校則で定められた白無地の素っ気ないブラジャーが露わになり、それも一気に取り払うと豊かな乳房が夏の生ぬるい空気にさらされた。

元々同年代よりは発育のいい胸だが、今は興奮に硬く張りつめてより大きくなっていった。乳暈もパンパンに膨らんで乳首も勃起しきって、乳房全体がつんと天井を向いてそそり立っているように見える。

式の物と違って柔らかな女性的丸みを感じさせるふくらみは、興奮の汗にしっとり濡れていた。薄い蛍光灯の明かりを反射して艶めかしいからりすら帯びている。藤乃を陵辱した男ならずとも、この乳房を見せつけられれば誰だって触ってみたいと思うだろう美乳だ。

「もうすぐ……もうすぐです……貴女にも……」

——この素敵な痛みを。

しばしの間夏の雨に湿った空気を乳肌で愉しんでから、藤乃はスカートをまくり上げた。汗に濡れて照り光る黒のパンティストッキングに包まれたおみ足と、その奥に透けて見える白の下着が薄闇に輝くように現れる。

薄いナイロンに隠されたデルタは、底の部分に舟形のシミができあがっていた。スカートの隠されていた彼女の牝臭がむわっと立ち上り、辺りに

漂う淫臭がさらに強くなる。

「……」

藤乃は一瞬だけ躊躇するとパンストを破り、パンティをずらした。そして。

ずぶっ……。

「あ、はっ……!!」

スプリングの短い方を自らの秘唇に突き立てた。式の痴態に充分興奮してきた藤乃の秘部はもう十分すぎるほどに潤っており、鉄塊を難なく受け入れた。ざわめき始めていた肉襲が異物に強く擦られ、膝が震えるほどの快感が股間で生まれる。火照った体と膣に、冷えた鉄の感触が心地よかつた。

うなじがちりちりするような感覚を覚えながら、ずり落ちないように奥までグツと押し込む。

「はあっ、あは……!!」

藤乃の細い体が一瞬ビクンと跳ね上がり、腹部がぼこりと膨らんだ。

加減を知らない男達は何をしても無反応の藤乃に、異物プレイを強要したことがあった。痛みを知らない体は奥まで何でも飲み込み、結果として子宮さえもが異物を受け入れられるようになっていたのである。

し字スプリングは未だ式の中に埋め込まれている物よりは細いとはいえ、藤乃のお腹を膨らませるには十分な太さがあった。最奥でそれをくわえ込んだために、直立の姿勢でも異物は抜け落ちない。代わりに鉄骨と秘唇の間から愛液がぼたぼたと滴り落ちた。

「さあ始めましょう両儀式。貴女が私を似た者だというのなら、解つてもらえますよね？」

疑似ペニスを股間にそそり立たせ、地面に愛液の跡を残しながら式へと

向かっていく。自分自身気づかぬまま、薄く微笑みながら。

そして、藤乃が股間を合わせたのは巨大な異物が入ったままの秘唇ではなく、たれ落ちた愛液に濡れながら妖しく開閉を繰り返すアナル。スプリングの先端をすばまりに押し当てたかと思うと、一気に押し込んだ。

ずむんっ!!

「うあああああっっっっ!!」

肛門括約筋が裂ける手前まで大きく押し広げられ、スプリングは直腸内へと侵入を果たした。普段は排泄を司るその部分に極太で挿入を受け、式の目の前でどす黒い火花が散った。真っ赤にゆであがった頤が限界まで反り返り、カクカクと震えるたびに涎が周囲に飛び散っていく。

「くはあああっっっ……はあーっ……っく……」

それでも藤乃は容赦なく腰を押し進め、スプリングの大部分が式のアナルに収まってしまった。二本もの巨根もどきがねじ込まれ、内臓が全て押しつぶされてしまいそうだ。腹がパンパンに膨らんで張り裂けそうだったが、皮が伸びきるぎりぎりした感触でさえもが今の和装少女にとっては快感に感じられる。

挿入された瞬間はナイフで真一文字に切り裂かれるような痛みを覚えたが、それももう無い。代わりに股間から産まれる閃光のような快感波が式の体を一直線に貫いていた。

「痛い、ですか？」

答えを待たず、藤乃は自分の手で自分の乳房を、もう片方の手で式の乳房を鷲づかんだ。かつて男達にされたように手のひら一杯に乳房を握りしめ、力強くぎゅむぎゅむと揉み立てる。心臓の動きを確かめるかのように強く、そして激しく。

「かつ！ あっ！ ……っお！ お、んはっっ!!」

藤乃の五指が乳肌にたつぷりと食い込むと、その箇所から悦感が炸裂した。心臓そのものを快楽の手で揉みほぐされているようで、一揉みごとに息が詰まる。さらに勃起した乳首を折るように手のひらで乱暴に圧迫されると、脳みそまで揉み込まれているような快感が走って情けない喘ぎ声が切れ切れに漏れてしまう。

藤乃もまた、自分の乳房に爪を立てる。ちくつとした痛みが走るが、その痛みすらも今は心地よく、跡が付くほど強烈に胸を絞り立てた。痛めば痛むほどに快感は増し、異物をねじ込んだ膣がどうしようもないほどに疼きまくる。

「はひいっ！ ひうっ、おほっ！ はっ！」

「ああ……ああ……！」

絶息寸前の式の表情に魅せられ、藤乃は猛然と腰を使い始めた。普段の彼女からは想像も出来ないほど力強い動きだ。

直腸粘膜をこそげ取らんがばかりに目一杯腰を引く。

「おっっっっ……おっっっっ……おっっっっ！！」

スプリングの段差が腸をひっかくたびに、妖しい悦感の波がわき起こる。むき身の卵のような尻がその度にピクピクと痙攣を繰り返した。

抜け出る鉄塊が肛門括約筋をふるんふるんと弾くと、膣を貫かれたときとは違った鈍い悦感の稲妻が全身を蝕んでいった。鋭い快感ではないが、その代わりに脳を犯していく危険な麻薬のような感触だ。スプリングの段差が抜け出るたびに背筋がゾクゾクきてしまう。人間なら誰もが持つ排泄の悦びに近いものが式の体を支配しつつあった。

肛門を裏返ししながら抜け落ちる寸前までスプリングが引き抜かれると、今度は体当たりをするかのような強烈さで押し込まれる。

ずぶずぶずぶっ、どすんっっっ！！

「おうっっっっ！！」

式の腹で藤乃の鉄塊と膣に挿入されたままの鉄塊が激しくぶつかり合った。肉壁一枚隔てて火花が出そうなほど擦れ合った二つの異物は式のもつとも感じるところを情け容赦なく押しつぶす。

二穴で甘い痺れがわき起こり、膨れあがった腹が炸裂しそうなほどに気持ちいい。前の穴からは白い愛蜜が勢いよく飛んで藤乃の腹を濡らし、アナルからは黄ばんだ腸液がこぼれだして下に敷かれた白い紬に淫らなシミを作った。

「痛いですか？ 痛いですよ、私も凄く痛いです」

息も絶え絶えな式を組み敷いた藤乃は微笑みながら呟く。

「もっと痛くしてあげます、私の痛みを感じて下さい」

その言葉と共に、少女の激しいストロークが始まった。ズンっ、ズンっ！ズンっ！！ と激しく腰を使い、自らの股間を式の股間に激しく打ち付ける。その度に尻から頭のとっぺんまで激しい振動が走り抜け、式の全身がぐんぐんと壊れたおもちゃのように揺さぶられる。

体が揺れるたびに子宮内に埋まったままの鉄骨もまた激しく振動した。狭い肉壺の中で暴れ回ると子宮頸部が鉄骨に強く押しつぶされてしまう。全く予期しないタイミングに毎回違った力加減で責め立てられるので慣れることも出来なかった。

「きひっ！！ はっっ、あおっ、あうっっ！！」

スプリングに子宮の性感帯Pスポットを押されるたびに、式は背骨が折れるのではないかというぐらいのけぞりながら愛液をしぶかせる。死んだ左腕以外の肉が勝手に反応し、ほとんど無軌道にはね回った。

式のダイナミックな肉体の蠢きは挿入している藤乃にも鉄棒を通して伝わってきた。激しくうねる腰はまるで長髪の少女を犯しているような動き





だ。ガクガクガクと小刻みにスプリングを動かされると、男達に開発され尽くした粘膜がぐちゃぐちゃとかき回されてしまう。その度に藤乃の全身にも悦感電流が走り回った。あまりの気持ちよさにはしたない涎がこぼれ落ちるのを止められない。

「凶れ、凶れ、凶れ、凶れ……!!」

藤乃は激しく腰を使いながら念じまくる。自分の腹の下で喘ぐ少女の乳房をねじり、子宮をねじり、膣をねじる。一突きされると同時に全身の急所をキュツとねじられると、激しい激感と共に快感神経そのものを曲げられているかのような強烈な快感波動が体のあちこちから産まれて、式の全身をいともあっさり飲み込んでいく。

「おっっっ!! おおおっっっ!!! おおあああああううううっっ!!!」

式はもうほとんど白目を剥いていた。一撃されることに絶頂し、ねじられることにイカされる。愛液が止めどなく吹きこぼれ、全身が病的なまでに痙攣を起こして止まらない。頭の中で極彩色の花火が乱打されてまともに物を考えることすら出来なくなっている。

物を考えられなくなっているのは藤乃も同じようであった。狂ったように腰を振り、ただひたすらに式と痛みを分かち合う。だが、それももう限界に近いようだった。

式の肉に突きこむたびに自らの肉体も燃え上がり限界が近い。ぶちゅぶちゅとスプリングが濡れ肉を抉るたびに藤乃もまた、全身を激しくのけぞらせて痙攣を繰り返す。

「藤乃は、藤乃はっ……!!」

ひとときわ強く腰を突き入れた瞬間。式も、そして藤乃も限界を迎えた。

「はああああああ……っっっっっ!!!」

「はおおおおおおっっっっ!!!」

二人の喘ぎ声がシンクロしぴったり合わさった股間からぶしゃあっと愛液が迸った。潮や尿が入り交じった液体が二人の間で混ざり合い、淫らな池を作っていく。

「ああ……はっ……」

「お……お……」

式は失神し、藤乃は恍惚の表情を浮かべ――。

「――ごふっ」

涎の混じった血を吐いた。今まで気にもしていなかった……いや、気づかなかった痛みが急に腹部に充満し、耐え難いほどになる。急激に意識が薄れ、呼吸が苦しくなってきた。病人にあれほどまでの激しい運動は致命的だったとしか言いようがない。

あれほど精力的に式を責め立てていた肉体からがっくりと力が抜け、股間からスプリングを滑り落として淫液の池に倒れ込んだ。

――これが痛み、ほんとうの痛み。

あれほど痛んだから、この痛みが恨めしい。いや、あれは痛みではなかったんだ。自分が弄んでいたのはそれではなく――。

心臓を突き刺すような激痛で全身が痙攣する。今まで感じていた違う感触のおかげで、この痛みが鮮烈に感じられる。だけど、その痛みが恨めしかった。あれほど焦がれていた痛みは、あれほど愉しんでいた痛みが……。

――死にたくない。

「苦しいか」

苦しみの果てに、股間から汁をしたたらせた式が立っていた。

その手にナイフを持って――。

■あとがきと言う名の反省会■

如何でしたでしょうか。  
「キメェ」「グロイ」「何がしたいのかわからない」  
そんな声が聞こえてくるようです。  
また触手好きからしてみても、  
「物足りない」「ねちっこさが足りない」「あっさり墮ちすぎ」  
などといったご意見も聞こえてきそうです。  
いやまったくその通りで、勢いだけで押しすぎた内容と  
なっていました。  
またワンパターンな構図やコマ割で、  
折角の触手を活かしきれいでいません。  
単純に触手を増量し突っこんでいるだけでは  
エロくはならない事を痛感した今回でした。  
そして反省するだけでは当然意味が無いので  
確実に次をよくする為の血肉にしなければ。

よし、マジメに反省した。してますよね？したした。  
ならヨシ。

8037


まあそんなワケで私の方の漫画はアレでナニでしたが  
ゲストの高橋高橋良喜氏からはちゃんと痛覚残留からの  
スピンオフという事でエロい小説を書いて頂きました。  
コレが無ければビジュアルだけバクった  
オリジナル触手本となるとこだったので感謝感激ッ。  
あらためてありがとうございます。

また触手属性も無いのに毎度手伝わされている  
Denim氏にも感謝を！

さて例によって今後ですが、性懲りも無くセイバー本を！  
しかも今度は触手と純愛で2冊出したいッ！  
そして送るのは触手脳より厨2脳！！  
笑われたって良い、たくましいのが描きたいのッ！！  
そんな感じで冬を目指していきたいと思いますので  
今回ので呆れる事無くお付き合い頂けたらなーと思います。

それではまた。

2008/08/17 無望菜志



■ RE08 奥付

発行日：2008年08月17日

発行：RUBBISH選別隊

URL：<http://www3.ocn.ne.jp/~rss/>

連絡先：[rss@crest.ocn.ne.jp](mailto:rss@crest.ocn.ne.jp)

RE08  
R-18 FOR  
ADULT  
ONLY

RUBBISH 選別隊